

和歌：文苑

著者	氷川，松露生，中内，義一，彌生，江楠生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	39
ページ	38-39
発行年	1895-10-16
URL	http://hdl.handle.net/2298/4637

立 秋 風

氷 川

涼さを身にえる程も秋風のたつとまきけはものうかりけり

來んといひし人の事ありて來すと

云ひよこせたる文を見て

たへてやは今は來ぬどの言の葉に秋はさひしくなりまさりける

別れし後に紀念の扇の文字を見て

おどめ玄扇手にとるひまたにもかせのたよりをまたぬ日はなし

清童を我國へ伴なひ來れる中嶋君

によみて遣えける

移し植ゑし君かなさけのつゆけさにから撫し子もさきまさるなり

松原秋夕

松 露 生

夕されは沖よりくれて濱風の松の梢をわたるさひしき
すゝしさに夏をわすれて夕すゝみ月もすむなり松の下露

百 合

夏草のしけみをよきてさきにはふ老木か下の姫百合の花

霧 中 旅

朝さりのあさたらゆけは小倉山いなく駒の聲とうれしき

羈 中 曉 鐘

中 内 義 一

故郷を思ふ旅寢のかり枕あはれ敷そふあかつきの鐘

秋 月

吹きはらふ風のまにくなかむれば雲のあなたに月影そすむ

暮 松 風

彌 生

入日さす峯の梢をふきわたるなこりも高し松風の聲

初 秋

いつのまに秋や來にけんませかきにけさ音たつる萩の上風

秋 夕

さらてたに淋なき秋にわく露の人の心のあなうよの中

五箇山中岩間の水の流るゝを見て

江 楠 生

心ある人こそ汲まめ岩清水すみて甲斐ある五箇の山里

こよひは何處へ宿らんなど云ひ合へるに

なかくにゆかしかりけり深山路は夜毎くの宿を尋ねて

庭 萩

朝日影いたくな照りを露乍ら見まくのはしき庭のはきはら

初聞秋聲

杉山巴城

炎熱一空驟雨晴書窓今夜月光清忽聞樹杪秋風起何識蟲聲總此聲